

修士論文概要

少人数地域における自分らしい暮らしとは何か
—伝統野菜を栽培する人びとの事例から—

秋山 博美

研究の目的と方法

本研究の目的は、少子高齢化、過疎化が進む少人数地域において、自分らしい暮らしとは何かを明らかにすることである。地域住民の取組みの一つである伝統野菜栽培を続ける住民の活動に焦点を当てた。全国的な人口減少が進んでおり、2020年の国勢調査によると、2070年には現在の人口の約7割まで減少すると推計されている。人口減少対策として1970年に過疎地域対策緊急措置法が制定されたものの、50年以上にわたり人口減少の課題への取組みが続いている。さらに、2014年には地方創生政策が始まり、同時期に日本創生会議による増田レポートが発表された。このレポートでは、人口減少が進み消滅する可能性のある896の都市を消滅可能性都市として示している。他方で、近年では人口減少を前提に、それを受け入れながら暮らしや地域づくりを進める動きも見られる。例えば、北海道東川町の「適疎」、徳島県神山町の「創造的過疎」や「にぎやかな過疎」の取組みが挙げられる。これらの例では、過密でも過疎でもない環境や、単なる人口数だけでなく地域の価値向上を目指したりする新しい視点が導入されている。しかしながら、こうした地域全体の取組みに関する研究は多く存在するものの、個人の活動や思いに焦点を当てた研究は多くはない。そのため、地域や住民をより深く理解するためには、さらなる事例の積み重ねが必要であり、本研究はその一環として実施した。自分らしい日常の暮らしは、人々が地域に住み続ける要因となり、その継続性が地域の今後のあり方に影響を与える。全国的に人口減少が進む中で、人口減少を前提とした地域社会に関する視点や多様な価値観が重要であり、実際に地域で暮らす人々への見方を捉え直す機会となる。

本研究の方法は、文献調査とフィールド調査である。文献調査では、人口減少の歴史的背景や少人数地域の課題、解決策、議論などを整理する。他方、フィールド調査では、5名の伝統野菜栽培者への個別インタビューを実施した。自分らしい暮らしとは、個別性や多様性があると考えられるため、施策や事例の調査だけでは不十分である。そこで、個別インタビューを行い、語りの分析を試みた。フィールド調査は長野県塩尻市檜川地区で実施し、インタビューに加えて祭事や集落の観察も行った。

論文の構成

第1章 研究の背景と目的

- 第1節 研究の背景
- 第2節 問題の所在
- 第3節 研究の目的
- 第4節 研究の方法

第2章 人口減少に至る歴史的経緯、問題と対策

- 第1節 歴史的背景
- 第2節 人口減少に関連する問題
- 第3節 人口減少対策
- 第4節 まとめ

第3章 少人数地域に関連する議論や先行研究のレビュー

- 第1節 少人数地域へのアプローチにおける議論
- 第2節 少人数地域に関する先行研究のレビュー
- 第3節 まとめ

第4章 分析枠組みや視点の設定及び事例の選定

- 第1節 自分らしい暮らしとは
- 第2節 視点や分析枠組みの設定
- 第3節 事例の選定

第5章 事例の概要

- 第1節 長野県塩尻市および楢川地区の概要と取り組み
- 第2節 羽淵集落の歴史
- 第3節 羽淵キウリの始まりから終了、そして再開まで
- 第4節 伝統野菜とは何か

第6章 伝統野菜栽培者の思い

- 第1節 調査の概要
- 第2節 栽培者の概要
- 第3節 語りの内容と6つの要素からみえた自分らしい暮らし
- 第4節 総合的考察

第7章 結論と今後の課題

- 第1節 結論
- 第2節 今後の課題

謝辞

論文の概要

本論文は7章から構成され、各章の概要を以下に説明する。

第1章では、問題の所在、研究の目的と方法について述べた。人口減少が進む地域を捉える際に、人口の増減あるいは、地域の一時的な活性化目的の取組み内容だけに焦点を当てすぎると、そこに暮らしている人びとの意識や価値観が見過ごされる可能性がある。そのことは、本来、誰の、何のための取組みであるかといった本質部分を考慮せず、人びとへの関心を置き去りにしてしまうという問題がある。人は誰しも、自分の望む、自分らしい暮らしをしたいと考えているが、自分らしい暮らしとは非常に抽象的であり、このような学術的研究はまだ多くはなく、具体的な暮らしはどのようなものなのか、あまり明らかにされていない。その地域に住む人々を知るためには、住民の暮らしに着目し、施策や人口数等とは別の視点で捉えることを試みた。本研究では、少子高齢化、過疎化が進む少人数地域において、自分らしい暮らしとは何か、地域住民の取組みの一つである伝統野菜栽培を続ける住民の活動に着目し明らかにした。研究の方法として、文献調査と長野県塩尻市をフィールドとし、住民への半構造化インタビューを実施した。

第2章では、人口減少に至る歴史的背景と問題、過疎対策について示した。社会問題の解決には、人口増加と経済の急成長が必要であると考えられていた時代があった。その後、大都市圏への人口移動等、どのような背景から人口減少時代へつながったかを歴史的に考察した。その結果、地方での人口流出と都市での過密につながり、それぞれで暮らす住民への暮らしの問題があることを示した。他方で、現代は多様性が尊重される時代であると言え、地域の実情に沿った取組みが可能である。住民の声を聞きながら、可能な限り政策に反映する等、個人の自己選択の機会や、経済指標に捕らわれない考え方が取り入れられ始めている。

第3章では、農村再生に関わる各人の議論を踏まえ、人口減少や過疎という現状をどのように捉え、考えるべきかを示した。議論からは、消滅可能性都市や限界集落等の少人数地域に住む住民が、どのような意識でいるのかはあまり明らかになっていない状況で、農村たたみ論や縮退、撤退という議論がなされている。渥美は、「集落の有無ばかりに注目するのではなく、そこに住む人々にとってどのような問題として経験されているのかが把握されなければならない」（渥美,2023,p167）と言及していることから、社会や施策、地域への視点に留まらず、個人に視点をもつ必要性があると言える。少人数地域に関する先行研究レビューを通し自由度から自発性につながることで、地域の魅力を再発見することから暮らしの満足感や愛着あるいは誇りをもつことにつながることで、交流をすることから信用や信頼関係につながることで、集落づくりから楽しさや生きがいにつながることで、地域貢献から幸福感や主体的貢献感につながることで、こだわりをもつことは自分らしさにつながることで、多様性があることは自分らしさであることが理解できた。少人数地域へのアプローチの議論や先行研究のレビューを読み解きながら、自分らしい暮らしにつながる要素をまとめた。それらの視点を個人要素と環境要素に分類し、個人の要素から、自分らしさを導き出した。

第4章では、人口減少が進む少人数地域に関する議論や先行研究のレビューを踏まえ、自分らしい暮らしとは何かを明らかにするため、視点や分析枠組みを提示した。自分らしい暮らしとは何かを明らかにするために6つの視点を分析枠組みとし、自由度、価値観、つながり、選択、楽しみ、役割の6つ視点を設けた。各項目は、少人数地域あるいは、さらにそこで暮らす人びとへの関心を向ける上で必要な視点であり、それぞれの視点や枠組みについて記述した。

第5章では、研究のフィールドとして選定した長野県塩尻市檜川地区羽淵集落についての概要と取組みを述べた。羽淵集落とは、塩尻市の最南端に位置する、標高1,100mにある集落である。伝統野菜である羽淵キウリは100年ほど前から大切に栽培されてきた。羽淵キウリを含む伝統野菜と、全国あるいは長野県の取組みについて詳細を説明している。

第6章では、調査概要とインタビュー実施者の概要、インタビュー内容を示した。第4章で提示した分析枠組みや視点を踏まえ、インタビューでの語りを詳細に示し、6つの要素である、自由度があること、価値観をもつこと、つながりがあること、選択すること、楽しむこと、役割をもつことの要素から見えた、自分らしい暮らしを考察した。

第7章にて結論と今後の課題について述べた。本研究を通じて、少人数地域における自分らしい暮らしとは、自分なりの価値観をもち、自分の意思で選択し、楽しみながら、役割や他者とのつながりを大切にできる暮らしであるということが明らかになった。つまり自分軸のある暮らしであると結論に至った。重要な点として、全ての要素が必要であるということではなく、個々人に必要な要素という理解である。他方で、これらの要素を含む暮らしには、自由度を許容し、理解する他者の存在が求められる。

本研究では、関係人口をはじめ、地域の好事例等、地域全体を捉え、中心に考えるのではなく、地域住民の取組みや暮らしに着目した点、自分らしい暮らしといった、抽象度の高いものを具体的な暮らしに下げて考え、捉え直しにより理解しやすい要素につなげた点、伝統野菜栽培に取組む5人の住民であっても、それぞれに考えや思いがあり、自分らしさの多様性があることが確認できた点は本研究の特徴である。